

412) ポストンバック

昨夜からの雨が、朝方上がったものの、霧が発生して電車のダイヤがエラク乱れた。それでも仕方なくいつものように浦和駅で快速に乗り換えると、電車はもう寿司詰状態である。最前列に並んで、真っ先に電車内に飛び込んだところまでは良かったが、瞬間、眼鏡がすっかり曇って、もう何も見えない。眼鏡を取ればいいのだが、この日にかぎって荷物がある上に、傘まで持っているから両手が塞がっている。後から乗ってくる乗客に押されてどンドン奥の方に追いやられてしまう。ところがあるところまで来ると、どでかいポストンバックを持っている人にぶつかって、それより奥へは入れない。私はポストンバックと人間の間で挟まれて、モミクシャにされて耐えていたが、なにしろ眼鏡が曇っていて、周囲も足もともよく見えない。そうこうしているうちに電車は走り始めて、次第に眼鏡の曇りがとれて、ふとポストンバックに目を凝らすと、それはポストンバックではなかった。そこには外人の中年女性がドーンと構えており、どでかいポストンバックと思っていたのは、何と子牛ほどもあろうかと思われる、どでかいおヒップだったのである。それにしてもあんなでっかいおヒップを、目の当りにしたことは今までになかった。片足だけでオイラの胴回りぐらいはある。あのおヒップの下敷きにならないですんだことを、神様に感謝することにしよう。